

明治末～大正半ば泉北地域の織物工場

北池田村・門林織布工場を素材に

佐賀ゼミD班

経済学部3年 川村 公人
経済学部3年 橋本 直子
経済学部3年 山根 志貴子
経済学部3年 湯本 理紗
社会学部3年 栗山 誠
文学部3年 小川 玲奈
文学部3年 豊岡 みづほ

<目次>

I．論文の課題と先行研究について

II．明治末～大正期における南北池田村
の織物工場 統計資料から

III．原料綿糸の買入れ状況について

IV．女工の出勤と出来高

製織過程の分析

V．製品の払い出し(売り上げ)について

VI．まとめ

I．論文の課題と先行研究について

本研究は、泉北郡北池田村に所在した門林織布工場を素材に、泉北地域の綿織物業の実態を明らかにしようとするものである。

まず明治～大正期の泉州地域における綿織物業に関する最もまとまった研究である中島茂『綿工業地域の形成』¹⁾について同書の第5章、第6章を中心に要点をおさえよう。

第一に、中島氏の論文では、この時期の大阪府内の綿織物業の動向について述べている。この時期の大阪では、賃織が減少し、急速に工場数が増加している。また織物生産の「近代化」を意味する工場生産への移行は、生産規

模の大きい泉南郡よりも泉北郡のほうが、明瞭であった。1920年代には賃織はほとんど無くなり、職工数や織機台数規模が大きくなり、従来の副業的賃織生産は、工場による生産に変化した。

第二に、旧泉郡北部における機業経営の担い手の出身階級と農村の経済構造との関わりを、旧泉郡北部の4つの村の事例から検討している。織物工場主の農地の所有状況を分析し、この時期に織物工場の経営に乗り出した人びとは、村ごとにその階層に上下はあるものの、各村の中堅以上の地主層がその中心であったことを明らかにした。

第三に、旧泉郡北部の村々で工場が簇生した要因を検討し、中島氏は次のような点をあげている。すなわち、①全国市場の中心である大阪との近接性と織布技術の歴史的な蓄積、②毛穴を中心とした石津川沿いの布晒し業の存在、③地元で安価な木製力織機が制作され、比較的小資本で多数の力織機を揃えることが可能になったこと、などである。他方で、綿毛布生産地域は大津村(現在の泉大津市)を中心に広がったが、その理由は、白木綿とは違い、分業の必要から集まっていた方が効率的であったからであるとした。

第四に、明治～大正時代の泉北郡における織物工場の展開状況を大字単位で検討すると同時に、これらの織物工場主の性格をみるために、泉北郡最大の企業家であった久保惣太郎の工場経営動向とその影響についても分析した。その結果、織物工場主は同一村内でも特定の大字に集中する傾向が見られる一方、工場主のほとんど現れない大字も存在するなど、工場主の輩出には地域的偏差が大きかった点も明らかにした。

こうした中島氏の研究は、泉北地域の綿織物業の全体的な動向という点では参考になる。しかし、織物工場内部の経営実態については、史料的な制約もあって明らかではない。

次に近年の研究としては、和泉市史編さん委員会編『松尾谷の歴史と松尾寺』²⁾がこの時代の織屋とその経営実態について北松尾村と南松尾村の事例をもとに触れている。同書では久保家文書を用いて、久保熊治郎の工場について述べ、女工の勤務実態や経営状況にも触れている。しかし、一般向けの

歴史書という事情もあって経営内部の実態分析は、ここでも十分でない。

したがって、本研究では綿織物工場の経営内部の具体的実態を明らかにする視角から、門林織布工場の経営帳簿を分析していくことにする。

そこで、まず本研究で使用する門林正浩氏文書³⁾の概要について説明する。

門林正浩氏文書は、2008年8月初め、大阪市立大学と和泉市の合同調査の際に、その存在が確認された史料である。この史料は、池田下町・願成集落^{がんにょう}の門林正浩氏宅に所蔵されていた明治～大正期の織屋（門林織布工場）の文書で、ほとんどは織屋経営に関わる帳簿類である（表1参照）。帳簿類16点と、小切手帳や領収書など8点、合わせて24点が含まれる。例えば、女工の通勤・出来高記録にあたる帳簿、原料綿糸などの買入記録にあたる帳簿、製造品の販売（納品）記録にあたる帳簿などがある。当時の門林家の当主名は、明治末年の時点では槌五郎で、大正期には宇太郎と見え、小切手の記載には「木綿商 〆 門林宇太郎」などともある。この史料を分析することに

表1-1 門林正浩氏文書の概要

史料No.	表題	作成年次	内容	本研究での分析	
箱1-1	原料品受払帳	明治42.1.3	原料糸の受領記録	第3章	
箱1-2	原料品受払簿	大正5.2.1	同上		
箱1-3	通勤簿	明治44.6	女工の出勤・出来高記録		第4章
箱1-4	査定簿	明治45	製品の種類（白木綿・畦織）・単価・税額などの書き上げ（中身は大正5～）		
箱1-5	金銭出入簿	明治45.1.吉日	入金・出金の記録（「大阪行」「税金」等）	第3章	
箱1-6	萬覚帳	明治45.7	相手別（糸店ほか）の入金・出金の整理簿		
箱1-7	織物帳第2号 原料品受ノ部	年不明.3.2	綿糸仕入れの記録 冒頭は仕入先名称あり		
箱1-8	製品受	大正元.11	同上 数字のみ		
箱1-9-①	製品受	大正4.4	同上 数字のみ		
箱1-9-②	綿糸通（堺市新在家町蔵内商店）	大正6.1	原料綿糸買入記録か、①に挟み込み		
箱1-10	査定済品受払簿	大正4.11	織り上げた製品の査定の記録		第5章
箱1-11	買入帳	大正6.1	中川糸店・蔵内糸店など店ごとの原料糸買入記録（石炭、小麦粉なども）		第3章
箱1-12	木綿売上帳	大正6.1	竹島字蔵、双馬商会などへの製品の売却記録		第5章
箱1-13	製品日記簿	大正6.7.1	女工の出勤・出来高記録		
箱1-14	買入帳	大正9.1.吉日	糸・石炭など買入記録	第5章	
箱1-15	木綿売上帳	大正9.1.吉日	竹島字蔵、双馬商会などへの商品の売却記録		
箱1-16	当座小切手帳（五十一銀行浜寺支店）	大正6.12.3	門林商店が切った、振り出した小切手の控え（糸店などへの支払いや税金納入）		
箱1-17	当座小切手帳（五十一銀行浜寺支店）	大正8.1.27	同上		
箱1-18	当座小切手帳（五十一銀行浜寺支店）	大正8.12.15	同上	第5章	
箱1-19	当座小切手帳（五十一銀行浜寺支店）	大正11.10.13	同上		
箱1-20	当座小切手（寺田銀行府中出張所）	昭和6.10.19	同上		
箱1-21	小口当座預金通帳	大正9.9.1			
箱1-22	領収証 織物引受人奥村敬太郎	年不明.6.27			
箱1-23	「はがき」合資会社難波聯合店	大正4.3.10	貨物配達済の案内		

備考：門林正浩氏文書により作成。

より、この時代の綿織物工場における経営内部の具体的な実態が明らかになるだろう。

以下の各章では、次の内容で論述を進めていく。

第2章では、明治末～大正期における南北池田村の織物工場の分布とその特徴について述べる。ここでは、中島茂氏も用いた工場統計資料類から、この地域の工場データを抽出して統計的に分析し、本研究が取り上げる門林織布工場の位置も明らかにする。

第3章から第5章では、門林正浩氏文書を各方面から分析し、その結果を述べる。まず第3章では、原料となる綿糸の買い入れを記録した帳簿の検討から、買い入れ数量や金額、仕入れ先とその変化などを明らかにしていく。次に第4章では、女工の出勤と出来高に関する帳簿を素材として、女工の出勤状況や賃金、織り上げた製品の数量などを検討する。織物工場において最も重要な工程である綿布の織り上げ過程が明らかになるだろう。そして第5章では、出来上がった製品の払い出し（販売）を記録した帳簿の検討から、払い出し数量や払い出し先とその変化などについて明らかにしていく。

最後に第6章では、以上の分析をふまえて、経営帳簿から見えてきた門林織布工場のすがたについてまとめる。

（豊岡みづほ）

Ⅱ．明治末～大正期における南北池田村の織物工場 統計資料から

この章では、第3章以下で門林織布工場を分析する前提として、同工場が所在した池田谷地域の織物工場について、明治末～大正半ばの状況を統計資料から検討し、その特徴を明らかにする。

まず泉北郡全体の織物工場分布について触れておく。中島茂氏の論文に掲載されている表7-5（泉北郡木綿織物同業組合地区別・村別組合員数）⁴⁾から、明治30年代の泉北郡における織物商（工場主も含まれる）の分布を見ると、北池田村、南池田村と北松尾村の3つの村には1903年（明治35）の合計

で76名の業者が集中していることがわかる（泉北郡全体288のうち）。地図上で見ても、この3つの村は隣接しており、当時の泉北郡の織物業者の多くが、松尾谷北部から池田谷にかけてのこの地域に集中していたことがわかる。

1) 『工場通覧』からわかること

表2 1・2は『工場通覧』(明治42年版から大正10年版)⁵⁾から泉北郡北池田村・南池田村についての工場名や工場主、所在地、製品、創業年月、職工数、原動機の種類などに関するデータを抽出して、経年変化もわかるように整理したものである。

『工場通覧』大正7年版を見ると、南北池田村の織物工場において職工の合計数は312人にのぼり、そのうち女性が278人（約89%）と女工が9割ほどを占めたことがわかる。これは、一般に女性のほうが男性よりも手先が器用で賃金が安かったからであろう。

また、大正7年版の『工場通覧』に掲載された工場の条件は職工数10人以上とされているが、明治42年版の『工場通覧』には職工数が10人未満の工場も掲載されていた。したがって年によっては『工場通覧』に掲載された以外にも織物工場が存在していた場合があるのではないかと考えられる。以上を前提に、以下、具体的に見ていく。

南北池田村の工場について中島氏は論文の中で以下のような点を指摘している⁶⁾。

まず北池田村については、①ほとんどが白木綿工場で明治末から大正初期に創業が集中している。②工場の規模はいずれも10～30人台の小規模工場である。③工場主が親子兄弟、姻戚関係にあると見られるものが多い。④機業家の中に地主層や村会議員、村の産業組合員などの役職者がおり、他の村に農地を所有する者もみられることから村内での経済的地位が比較的高かった。⑤織物工場を創業する以前に仲買または織元として営業していた工場主が含まれていた、と指摘した。

また南池田村については、①創業時期は大正期に入ってからのもが多い。

表 2 1 北池田村の工場主と工場規模の経年変化（明治42 大正 9 年）

No	工場名	工場主	所在地	製品	創業年月	職工数・原動機の種類														
						明治42年	明治43年	明治44年	明治45年	大正2年	大正5年	大正6年	大正7年	大正8年	大正9年					
1	①工場	門林楯五郎	池田下	白木綿	明治41年 4月	19・蒸気		17・蒸気	17・蒸気	23・蒸気										
2	門林織布工場	門林宇太郎	池田下	白木綿	明治41年 4月					23・ガス	28・ガス	32・ガス	29・ガス	25・ガス	24・ガス					
3	藤原織布工場	藤原幸三郎	室堂	白木綿	明治41年10月	11・水車	11・水車	11・水車	15・水車											
4	門林工場	門林嘉七	池田下	白木綿	明治44年 6月				4・石油	10・石油	10・石油									
5	三井織布工場	三井治平	池田下	白木綿	明治44年 6月					22・ガス										
6	三井治平織布工場	三井治平	池田下	白木綿	明治44年 6月					36・ガス	36・ガス	32・ガス	36・ガス							
7	大植織布工場	大植亀次郎	伏屋	白木綿	明治44年 8月				15・石油	17・ガス	17・石油	21・石油	16・石油		13・石油					
8	㊦織布工場	村田幸吉	伏屋	白木綿	明治44年 9月					22・ガス	24・ガス	28・ガス	22・ガス	18・ガス						
9	久住織布工場	久住楠治郎	不明	白木綿	明治44年12月				27・ガス	27・電気										
10	△織布工場	三井正之	池田下	白木綿	明治45年 1月					28・ガス	28・ガス	28・電気	27・ガス	14・ガス	20・ガス					
11	源廣織布工場	源廣三郎	不明	白木綿	明治45年 3月						10・石油									
12	大中織布工場	大中保三	池田下	敷布	大正 5年 5月													10・不明		
13	大杉光分工場	村田秀次郎	室堂	白木綿	大正 6年 3月							19・水車						15・石油	15・水車	
14	瀧川織布工場	瀧川國太郎	池田下	白木綿	大正 6年 6月								11・ガス							
15	村田織布工場	村田秀治郎	室堂	白木綿	大正 6年 7月									19・石油	14・石油	15・ガス				
16	永野織布工場	永野楠五郎	池田下	白木綿	大正 6年 8月								10・ガス							
17	大植織布工場	大植サキエ	伏屋	白木綿	大正 7年 2月										14・ガス					
18	太田織布工場	太田廣次郎	池田下	牛毛布・煉瓦斯綿布・白木綿	大正 7年 3月														14・ガス	
19	杉本織布工場	杉本辰蔵	伏屋	白木綿	大正 7年 8月													13・石油	15・石油	
20	大杉織布工場	大杉定義	室堂	白木綿	大正 8年 9月														13・石油	
21	紀之定織布工場	紀之定久一	室堂	白木綿	大正 8年12月														13・ガス	
工場数の合計						2	1	2	5	9	7	6	8	6	10					
職工数の平均						15	11	14	15	23	21	26	21	16	15					

備考：農商務省商工局『工場通覧』各年度版により作成。中島茂『綿工業地域の形成』（第 6 章表 6 4）も参照した。

②北池田村と同じように機業家を生み出す基盤となる有力者が形成されていた、とした。

さらに、泉郡北部全体については、①工場主の輩出には地域的の偏差が大きかった。②織物工場が多数存在した大字は紀州街道や小栗街道、父鬼街道など、堺や大阪への交通アクセスのよい位置にあった。③品目別に見ると大津村周辺の毛布関連工場や堺市周辺の工場など地域的に偏在する類型と、白木綿工場のように郡部地域に広範に展開している類型もある、と指摘した。

しかし、ここで作成した表2 1・2からは、それ以外にも以下の点が指摘できる。

まず北池田村については、①原動機を見ると、大正5年からは、それまでの水車や蒸気機関に替わり、ほとんどの工場がガスか石油などの発動機を使用するようになった。②工場所在地は池田下に集中している、といった点が、また南池田村についても、①大正時代の工場数も全体的に北池田村に比べると少ない。②北池田村と同様、職工数が多い工場のほとんどがガス発動機を使用していた、などの点がわかる。

さらに、全体については、①大正時代の南池田村と北池田村を比較すると、工場数自体は北池田村のほうが多いが、職工数の平均規模は同じ程度である。②北池田村と南池田村のどちらの工場も大正8年までは1年ごとの工場の合計は10に満たないが、大正9年にはどちらの村の工場数も10に増えた。しかし、職工の平均人数は減っている。これは大正9年が不況の年であったことから考えると、工場主が人件費削減のために生産効率のよい織機を入れて職工を解雇するなどの合理化を行ったのではないかと考えられる。③大正期にはほとんどの工場がガス発動機を使っていることから、ガスのほうが石油より価格や効率面で有利だったと見られる、などの点が指摘できる。

以上をまとめると、この時期の南北池田村の織物工場は、全体として、新設を伴って工場規模の拡大と動力の切り替えなどが進んでおり、大正8年ごろがそのピークであったと言えよう。

表 2 2 南池田村の工場主と工場規模の経年変化 (大正 5 9 年)

No	工場名	工場主	所在地	製品	創業年月	職工数・原動機の種類				
						大正5年	大正6年	大正7年	大正8年	大正9年
1	西峰織布工場	西峰イソエ	平井	白木綿	明治44年10月	22・石油	19・石油			
2	藤原織布工場	藤原磯枝	浦田	白木綿	明治44年10月			14・石油	14・石油	10・石油 ガス
3	横山工場	千葉甚一	平井	白木綿	明治45年 2月	19・ガス	28・石油	28・ガス		
4	藤原織布工場	藤原文次郎	浦田	白木綿	大正 2年 4月	16・石油	17・石油	17・石油	17・石油	16・ガス
5	川口織布工場	川口スエ	国分	白木綿	大正 3年 7月	21・石油	28・ガス	22・石油	22・石油	24・石油
6	久保木綿織物工場	久保惣太郎	国分	白木綿	大正 6年 5月			50・ガス	45・ガス	44・ガス
7	川本織物工場	川本新之助	平井	白木綿	大正 7年 2月				14・石油	
8	大杉分工場	大杉光之助	平井	白木綿	大正 7年 3月				30・ガス	
9	久保分工場	久保茂三	国分	白木綿	大正 8年 4月					35・ガス 電気
10	⊙高橋織布工場	高橋彦太郎	平井	白木綿	大正 8年 7月					10・ガス
11	西峰織布工場	西峰馬太郎	平井	白木綿	大正 8年 8月					16・ガス
12	藤原織布工場	藤原藤太郎	国分	白木綿	大正 8年10月					13・石油
13	⊙油谷織布工場	油谷繁造	国分	白木綿	大正 8年12月					10・他
14	藤原織布工場	藤原信吉	浦田	白木綿	大正 8年12月					10・ガス
工場数の合計						4	4	5	6	10
職工数の平均						19	23	26	23	18

備考：農商務省商工局『工場通覧』各年度版により作成。中島茂『綿工業地域の形成』(第6章表6 5)も参照した。

2) 門林織布工場の位置づけ

門林織布工場は、表2-1のNo1・2に登場し、明治41年から大正9年まで掲載されており、職工数は榎五郎を工場主とするNo1が17～23人で、宇太郎のNo2では23～32人とあり、北池田村の中でも規模が大きい工場であったことがわかる。No1とNo2を見比べると、大正2年だけデータが重なっている。しかし、創業年月と職工数は同じであるから、これらは同じ工場が名義変更をする際に、何らかの手違いで『工場通覧』に別々に記録されたのではないかと考えられる。

また、No4の工場主である門林嘉七は、次章以下で見る経営帳簿にもその名が登場する人物で、中島氏の論文でも、北池田村は親子兄弟、姻戚関係者が多いとされているので、門林宇太郎の親族であった可能性もあるのではなからうか。

以上、本章では、中島氏の論文の成果にも触れながら、『工場通覧』から、工場数や原動機の種類、職工数、創業年月といった情報を統計的に分析してきた。池田谷地域は、泉北郡全体の織物工場の中心地の一つだったと言ってよく、その中でも特に規模の大きいこの門林織布工場の経営実態を分析することは大きな意義があるということを確認できた。

(川村公人)

Ⅲ．原料綿糸の買入れ状況について

この章では、「買入帳」などの帳簿から綿糸の買入れ状況について分析する。数年分の買入れ記録から、大正期における門林織布工場の原料買入れの実態に迫りたい。

1) 分析対象の概要

原料の仕入れ帳簿にあたる買入帳は、大正4年から5年までのもの（名称は「織物帳第弐号 原料品受ノ部」、門林家文書箱17）と、6年から8年

までのもの(「買入帳」, 門林家文書箱 1 11)がある⁷⁾。これらの帳簿の記載例を挙げよう。図 3 1 は「織物帳第壹号 原料品受ノ部」の 2 頁目の部分の写真である。これを見ると, 仕入れた「月日」, 「種類」, 仕入れの「数量」, 「取引先住所氏名」の欄があることがわかる。仕入れた綿糸の単位は重量(貫・匁)で表されている。「種類」の欄には綿糸と書かれているだけで, 詳しい銘柄などはわからない。仕入先に代金を支払ったと思われる日付と判子もある。

次に, 図 3 2 は「買入帳」13頁の部分の写真である。こちらの帳簿には「年月日」, 仕入先や糸の種類の書かれた「摘要」, 「買受金額」, 「支払金額」, 「合計或差引残」の欄があることがわかる。こちらの帳簿では, 仕入れた綿糸の単位が「個」という単位で書かれており, 「摘要」欄には糸の単価と思われる数字の記入もある。「個」という単位は帳簿中の記載から 1 個 = 20 玉であると確認できるが, 残念ながら 1 玉の重量はわからない。また, ここでは買

図 3 1 「織物帳第壹号 原料品受ノ部」の写真(2 頁目の部分)



い入れた糸の種類も明記されている。例えば右から3行目の記載を例に説明すると、この行の記載の意味は「3月28日に、大和という銘柄で太さは16番手の糸を1個買入れ、その単価は179円であるから買受金額は89円50銭となる。また、これに対して4月7日に支払いが行われ、その額は600円である。」ということになる。帳簿の上部には、仕入先の店舗が書かれた欄があり、ここに藪内糸店などの名称が書かれている。この帳簿では月別に書くのではなくて、仕入先ごとに分けて記入している。なお、ここでは検討しないが、この帳簿には綿糸以外にも石炭、小麦粉、油などの買入れ記録もある。

(橋本直子)

2) 考察

表3 2①は、箱1 7の「織物帳第壹号 原料品受ノ部」をもとに、大正4年1月～大正5年4月における糸の店舗別買入れ状況をまとめたものである。

図3 2 「買入帳」の写真(13頁の部分)

第一に、大正4年についてみてみよう。ここでは、数量が重さの単位である「貫」で記されているため、のちに見る大正6年、8年のものと単位が異なり、数量の比較は不可能だが、おおまかな店舗別の買い取りの割合は把握できる。この時期には、門林石松という人から全体の90%程度の糸を買い取っていることがわかる。他に中川、永野、山本などの名前が見えるが、このうち中川については後述するように、堺の糸店である。門林石松についてはどこの業者であるのか不明だが、名前から見て、門林織布工場の経営者の門林宇太郎とあまり遠くない関係にある人物だと考えられる。少なくとも大正6年、7年の『堺市商工人名録』⁸⁾には登場しないので、苗字から見て泉北、あるいは池田谷近辺の綿糸商である可能性がある。

以上から、大正4年時点では工場の地元か、その周辺にある糸店から、ほとんどの糸を買い取っていたとわかる。大正6年、7年には、中川や、ここには登場しない藪内などの堺の綿糸商が登場して、その割合が高まるため、大正4～6年の間に綿糸買い取り先の大きな変更があったといえる。

第二に、大正6年、8年について見る。表3 2②③は、「買入帳」(箱11)をもとに、原料綿糸の買い取り個数と買い受け金額、支払金額を月別に店ごとに集計したものである。

まず糸の買い取り個数について見てみよう。大正6年の数値を集計した表3 2②の左上にある中川糸店の買い取り個数を見ると、1～6月は約20～30個、7～9月は4個以下に減少し、10月～12月は約10～25個にまた増加している。ただし、藪内糸店の数値を見ると7～9月が特に少ないということはない。藪内は買い取り0の月もある。大正8年の数値である表3 2③から同年の各店の個数を見ても同様である。

したがって、買い取り個数は季節的なサイクルとは関係なく変動していると言えよう。なお、藪内糸店の大正6年3月と8月のように、同じ店から違う月に同じ個数を買入れているにもかかわらず、買い取り金額が異なっているケースがある。これは、元の帳簿の記載を見ると、買い受けた個数は同じでも、糸の種類が異なっていたためである。また、綿糸の価格が変動して

いる場合もある。

次に、各店からの買い取り個数と金額の合計数値の変化について見てみよう。大正6年の中川糸店と藪内糸店の月ごとの買い取り個数の合計は約50～60個である。月別の金額は約4000～6000円である。一方、大正8年の月ごとの買い取り個数の合計は約30～40個であり、金額は約6000～10000円である。個数の年別合計は、大正6年が538個、8年が438個となっており、大正8年には糸の買い取り個数は減少したが、買い受け金額は上昇したことがわかる。これは、第一次世界大戦によるインフレのため、原料綿糸の価格が上昇した

表3 2 原料綿糸の店舗別買い取り数量
(大正4年1月 5年4月) (単位: 貫)

年月	門林石松	中川幸三郎	永野源三郎	山本米吉	合計
大正4年1月	0.0				0.0
2月	0.0				0.0
3月	166.4				166.4
4月	193.2				193.2
5月	12.0				12.0
6月	66.0				66.0
7月	226.8				226.8
8月	450.0				450.0
9月	276.6				276.6
10月	110.4				110.4
11月	58.8				58.8
12月	72.0	156			228.0
大正5年1月	108.0		108		216.0
2月	210.0		72		282.0
3月	308.0				308.0
4月	139.8			36	175.8
合計	2398.2	156	180	36	2770.2

備考: 「織物帳第巻号 原料品受ノ部」(門林家文書箱1 7) により作成。

表3 2 綿糸買入れ先別の個数・金額 (大正6年)

年月	中川糸店			藪内糸店			合計		
	個数	買受金額	支払金額	個数	買受金額	支払金額	個数	買受金額	支払金額
大正6年1月	27 個	2455.75	1800	16 個	1606.50	1000	43 個	4062.25	2800
2月	20 個	1817.50	1700	29 個	2237.00	2100	49 個	4054.50	3800
3月	31 個	3042.25	3000	28 個	2412.00	2400	59 個	5454.25	5400
4月	29 個	2616.25	2300	20 個	3858.00	1900	49 個	6474.25	4200
5月	43 個	4116.25	3900	33 個	3084.45	3100	76 個	7200.70	7000
6月	25 個	2456.50	2100	19 個	1758.75	1800	44 個	4215.25	3900
7月	3 個	297.75	350	24 個	2750.25	1012	27 個	2750.25	1362
8月	4 個	391.00	0	28 個	3418.00	3800	32 個	3809.00	3800
9月	3 個	417.00	0	12 個	1596.90	1600	15 個	2013.90	1600
10月	12 個	1873.00	0	60 個	6708.40	4900	72 個	8581.40	4900
11月	26 個	3447.00	0	0 個	0.00	0	26 個	3447.00	0
12月	11 個	2892.50	0	35 個	5087.75	900	46 個	7980.25	900
合計	234 個	25196.00	15150	304 個	34518.00	19700	538 個	59714.00	34850

備考: 「買入帳」(門林家文書箱1 11) により作成。金額の単位は円。

表3 2 綿糸買入れ先別の個数・金額（大正8年）

年月	敷内系店			立上系店			阪森系店			合計		
	個数	買受金額	支払金額	個数	買受金額	支払金額	個数	買受金額	支払金額	個数	買受金額	支払金額
大正8年1月	23 個	2754.50	2300	12 個	1554.50	550.00	7 個	1319.0	749.00	42 個	5628.00	3599.00
2月	37 個	6129.00	5550	3 個	604.50	1700.00	0 個	0.0	0.00	40 個	6733.50	7250.00
3月	0 個	0.00	0	10 個	2045.00	2000.00	6 個	1166.5	1280.00	16 個	3211.50	3280.00
4月	21 個	4608.00	5300	10 個	3040.50	600.00	8 個	1691.0	434.25	39 個	9339.50	6334.25
5月	11 個	3473.00	3000	19 個	3251.50	3934.00	0 個	0.0	396.00	30 個	6724.50	7330.00
6月	15 個	2383.00	2500	15 個	3272.50	3700.00	5 個	1082.5	1002.50	35 個	6738.00	7202.50
7月	14 個	3259.00	2000	13 個	2421.50	1400.00	0 個	0.0	0.00	27 個	5680.50	3400.00
8月	22 個	4356.00	4000	15 個	2787.00	3785.50	0 個	0.0	0.00	37 個	7143.00	7785.50
9月	14 個	2617.00	2300	17 個	3160.50	3200.00	5 個	1285.0	1460.00	36 個	7062.50	6960.00
10月	21 個	6014.00	3550	12 個	3663.25	3700.00	8 個	2282.5	1600.00	41 個	11959.75	8850.00
11月	22 個	6421.50	3500	22 個	4226.50	1500.00	14 個	4390.0	6275.00	58 個	15038.00	11275.00
12月	18 個	5153.00	4617	12 個	1971.75	4004.25	7 個	2275.0	0.00	37 個	9399.75	8621.25
合計	218 個	47168.00	38617	160 個	31999.00	30073.75	60 個	15491.5	13196.75	438 個	94658.50	81887.50

備考：「買入帳」（門林家文書箱 1 11）により作成。金額の単位は円。

からと考えられ、先に見た買い取り個数の変動は、こうした綿糸価格の動きと関係しているのではないだろうか。

さらに、店ごとの買い取り個数と買い受け金額を比較してみよう。大正6年、8年いずれも、糸の個数、買い受け金額は藪内糸店が多い。大正6年は、中川糸店、藪内糸店の二店から糸を買い取っているが、金額の割合はおおむね40%・60%になる。一方、8年は中川糸店との取引がなくなり、新たに立上糸店と阪森糸店から糸を買い取っており、金額の割合はおおむね藪内50%、立上30%、阪森20%になる。ここでも藪内糸店が多いということがわかる。なお、阪森糸店からは、そもそも買い取りしている個数が少なく、買い取りしていない月が4か月もある。以上から、門林織布工場の原料綿糸買い取り先は6年、8年ともに藪内糸店が中心であることがわかる。

この藪内糸店については、門林家文書や『堺市商工案内』⁹⁾などから、いくつか確認できる情報がある。『堺市商工案内』では、営業種別は「綿糸」、営業税は857円31銭、主人名は藪内政吉、営業場所は堺市新在家町であったことが確認できる。営業税額から見てかなり有力な綿糸商だったと見られる。また中川糸店は、『堺市商工人名録』から、業種は「綿糸商」、主人名は中川幸三郎、営業場所は堺市の少林寺町であったことが確認できる。他の糸店については判明していないが、以上からわかるように、門林織布工場の綿糸の買い入れ先は、大正6年以降は堺の業者が、そのほとんどを占めるようになったのである。

最後に、買い受け金額と支払金額の関係について見てみよう。大正6年、8年ともに、ほとんどの集計箇所では支払金額が買い受け金額を下回っており、大正6年の8月、12月の中川糸店、8年12月の阪森糸店に至っては支払金額が払われていない(理由は不明)。この通りなら、これらの糸店への支払いが遅れ、ツケ(負債)がたまっていた可能性がある。

藪内糸店では、月ごとの買い受け金額と支払金額の差はそれほど大きくない。しかし、合計の差で見た絶対額は1万円近くもあり、かなり大きい。よって、藪内糸店へのツケが大きかったと言える。他の2店とは違い、藪内糸

店とは大正6年から取引しており、取引期間が長かったためとも考えられるが、いずれにしても、門林織布工場は、原料買い入れ先である藪内糸店への負債が増え、依存を強めたのではないか。

(小川玲奈)

Ⅳ．女工の出勤と出来高 製織過程の分析

この章では、門林正浩氏宅に所蔵されていた女工の通勤簿を材料に、女工の労働状況について検討し、織物工場の核となる製織工程の実態に迫りたい。

1) 「通勤簿」の概要

まず分析対象とする「通勤簿」(箱1-3)の概要をみておこう。この帳簿は、門林織布工場における明治44年6月～45年7月と、大正8年4～12月の女工たちの通勤簿である。女工たちの日々の勤務状況が記録しており、当時の労働者数、出勤状況、賃金や織り上げた布の量などが読み取れる。

この帳簿の実際の記載例を示し、その内容を説明しよう。図4-1は、この帳簿の6頁目と7頁目の部分の写真である。この記載を見ると、女工の出勤状況がわかる。例えば2人目のシカさんの場合、7月1～30日の間で3日のみが休みで他は出勤している。出勤日にはハンコが押してあり、ここでは、ハンコ1つを1工と数えており、「半工」とあるのは1工の半分だと考えられる。「工」が何を意味するのかは明らかではないが、これらの人は、①毎日一定量の布を生産していたか、②監督役として一定時間働いていたか、③糸の発注や布の検品をしていたか、あるいは④布を織る前の糸を巻く作業をしていたか、などが考えられる。しかし、次に見るように、布の製織をしていた女工についてはその量が記載されていることから、シカさんたちは①ではなく、それ以外の②～④のいずれかを担当していたのではないだろうか。

「前半月」という欄にある「弐十八工半」が7月の合計出勤数を表し、「後半月」欄の「七円九十八銭」は賃金にあたると思われる。また、4人目のマ

サエさんの7月5日のところには「九分」と書かれているが、これは1工に満たない勤務を表しており、1工の「九分」すなわち9割の勤務を意味すると推測できる。

次に図4 2をみる。この頁のケース(8・9頁目)では日ごとに捺印するのではなく、数字が記入されており、その日に織った布の量が示されている。例えば2人目のヨシノさんの記録をみると、7月1日は「拾三」とあり、13疋の「木綿」(白木綿)を織ったということがわかる。さらに、22日からは畦織も織り始めている。この日は「八反」織っている。「前半月」欄には1ヶ月に織った白木綿の量の合計と賃金、「後半月」欄には畦織の量の合計と賃金が書かれている。また、左端には白木綿の量に対応した「五円四十二銭」と、畦織の量に対応した「一元六十二銭」の総合計金額として「七円四銭」と書かれている。これが彼女のこの月の賃金総計になる。なお、上部の欄外に

図4 1 「通勤簿」の写真(6・7頁目)



は、女工ごとに「拾二」(12)などの数字が記されているが、これが何を示すのかは不明である。ただ、女工の織り上げた布の合計は、この欄外の数値も加えて計算されていることが確認できている。

なお、この帳簿には女工が1日に何時間働いていたかは記録されていない。他の記録が存在する可能性もあるが、ここに勤務状況と賃金総計があわせて記入されていることから考えて、彼女たちの賃金は出来高払いであったことがわかる¹⁰⁾。

以上から、この帳簿の記載内容を整理・集計していけば、各女工の出勤状況やその出来高と賃金、またその月別の状況や工場全体の総計なども把握することが可能になる。そこで以下では、内容別に考察を加えていく。

図4 2 「通勤簿」の写真(8・9頁目)



2) 考察その1 出勤状況と出来高

まず表4-1は、明治44～45年における女工の出勤人数と日数を月別に集計したものである。これを見ると、例えばNo.1の前田シカさんは明治44年6月は24日間出勤していたことがわかる。彼女は明治44年6月～45年2月の期間この工場に働いていた。シカさんのように網掛けしてある人は、先に図4-1で見たようなハンコの押してあった女工であり、その他の人は布の量が記入されていた女工たちである。最下段の集計を見ると、6月に働いていた合計人数は11人であることがわかる。月ごとにみると、若干人数が増えているが、1ヶ月にだいたい11～14人の女工が出勤していたことがわかる。No.1のシカさんからNo.11の門林ミツエさんまでの6月に出勤していた女工たちの出勤日数の総計は、のべ251日であった。

次に、女工たちが織った布の総量を月ごとに集計したものが表4-2である(ハンコの人は含まず)。ここからは1ヶ月間に各女工が織った布の量(合計

表4-1 月ごとの女工の出勤人数と日数(明治44年6月～45年7月)

No.	氏名\月	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	出勤日 総計(a)	出勤月 数(b)	a÷b
1	前田シカ	24	29	25	28	26	20	31	25	22						230	9	26
2	藤原マサエ	24	28	26	26	27	19	30	24							204	8	26
3	村タツエ	24	28	26	28	27	19	30	25	26	28					261	10	26
4	タツ	20	28	25	26	23	1			5	26	16	7			177	10	18
5	門林ヨシノ	22	28	25	26	26	16	29	23	25	26	17	7			270	12	23
6	藤原コノエ	23	27	25	24	26	18	28	23	19	28	26	23	23		313	13	24
7	藤原ふじ	22	28	25	26	26	17	29	23	25	22	17	7			267	12	22
8	藤原イマ	23	28	25	24	26	18	26	23	25	27	17	7			269	12	22
9	藤原タツエ	23	28	25	24	26	18	29								173	7	25
10	藤原トメ	23	28	25	26	27	12									141	6	24
11	門林ミツエ	23	28	24	26	26	16	29								172	7	25
12	藤原タメノ			19	0	26	18	29	21							113	5	23
13	クスエ				23	27	18	30	24	26	25	28	3			204	9	23
14	有本ハナ					23	18	29	24	27	21	7				149	7	21
15	藤原イサ						0	29	23		24	17	7			100	5	20
16	ユキエ							26	23	25	25	18	7			124	6	21
17	ミキエ								24	24	27	3				78	4	20
18	キク								23		16	16	6			61	4	15
19	ミヌ									26	28	28				82	3	27
20	ミヌ										27					27	1	27
21	キヌ											17	7			24	2	12
22	トヨ											25	26	24	2	77	4	19
23	タツエ											17	6			23	2	12
24	ミネ												26	24	2	52	3	17
25	横田コトメ														0	0	0	0
26	ミカ														0	0	0	0
月別合計(総日数)		251	308	295	307	362	228	404	328	248	356	283	146	71	4	3591	161	22
月別出勤(人数)		11	11	12	12	14	14	14	14	11	14	15	14	3	2	161		

備考:「通勤簿」(門林家文書箱1-3)により作成。網掛けした部分が出勤簿にハンコの押されている女工で、していない部分が布の出来高が記入されている女工を示す。

表4 2 女工別の出来高と賃金（明治44年10月）

No	氏名	布の種類	欄外記載	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	合計(a)	帳面記載の月合計(b)	(a)-(b)	賃金(円)	
1	タメノ	木綿	上	10	9	10	13	0	0	0	9	9	8	8	8	9	10	9	9	11	0	10	9	10	9	10	9	10	9	10	8	11	11	258	261	-3	6.78	
2	タツ	木綿		4	4	5	5	0	0	0	4	4	4	4	5	3	4	4	5	4	0	4	4	4	4	4	8	7	8	8	3	0	0	113	113	0	2.26	
		畦		30	20	18	22	0	0	0	18	12	20	18	18	14	16	18	18	20	0	20	20	18	20	18	10	8	10	10	4	0	0	400	390	10	3.7	
3	門林ヨシノ	木綿上																				2	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	39	38	1	99	
		畦		29	30	34	31	0	0	0	3	32	28	26	28	24	30	24	32	34	0	30	21	20	23	22	20	22	20	18	20	10	18	649	679	-30	6.45	
4	藤原コノエ	木綿																																40	40	0	80	
		畦		36	35	34	38	0	0	0	32	34	32	34	32	29	34	31	32	40	0	34	22	24	24	25	22	20	24	22	20	24	36	36	806	805	1	7.65
5	藤原フジ	木綿上																				1	3	4	4	4	7	7	7	8	8	6	4	2	65	65	0	1.69
		畦		34	33	32	38	0	0	0	36	32	33	30	30	30	30	34	34	0	26	23	18	23	10	10	10	10	10	10	12	10	22	28	668	663	5	6.3
6	藤原イマ	木綿上														1	4	4	3	5		3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	3	64	64	0	1.665		
		木綿		13	13	13	17	0	0	0	12	15	13	13	13	11	8	7	9	10	0	6	8	9	8	9	8	9	7	8	8	8	8	271	271	0	5.42	
7	藤原タツエ	木綿上																				3	4	3	3	4	4	3	4	4	4	3	3	4	94	55	39	2.47
		木綿		14	9	9	11	0	0	0	8	9	10	9	9	9	8	9	11	0	7	8	8	9	9	8	9	8	9	8	8	10	10	245	242	3	4.84	
8	藤原トメ	木綿上																				3	4	3	4	4	3	4	4	3	4	3	4	110	110	0	2.86	
		木綿		8	6	7	8	0	0	0	4	3	4	4	3	4	3	4	3	3	0	3	4	3	4	4	3	4	3	4	3	4	3	4	110	110	0	2.86
9	門林ミツエ	木綿上		12	16	15	14	0	0	0	11	12	11	11	11	10	11	11	11	11	0	11	10	10	11	12	11	11	11	10	11	12	10	7	294	294	0	7.64
		有本ハナ			?	?						6	9	10	12	11	10	12	9	12	13	0	11	10	11	9	12	10	11	11	10	12	11	12	244	246	-2	6.39
		木綿上	合計	20	25	59	64	0	0	0	54	51	51	49	48	48	52	52	55	57	0	21	26	28	30	32	33	30	32	32	34	22	27	23	666	626	40	115.33
		木綿	合計	50	44	46	55	0	0	0	48	54	54	55	55	51	51	45	52	57	0	46	48	53	50	58	55	58	57	55	52	46	48	50	1393	1398	-5	110.19
		畦	合計	129	118	118	129	0	0	0	89	110	113	108	108	97	110	103	116	128	0	110	86	80	90	75	62	60	64	62	54	54	68	82	2523	2537	-14	30.4

備考：「通勤簿」(門林家文書箱1 3)により作成。木綿・木綿上の単位は「疋」, 畦(畦織)の単位は「反」である。No.5の藤原フジさんの10月14日の記載は「三」となっているが、前後から考えて「三〇」が正しいと判断して修正した数値を入力してある。

a)と、全員の合計が明らかになる。さらに日ごとの木綿と畦織の合計もわかる。この明治44年10月には木綿と畦織の他に木綿「上」も織っていることがわかる。「上」という名前から、より上質の白木綿だと思われるが、木綿と木綿上のちがいははっきりしていない。

表4 1では、右端に各女工の出勤日の総計と出勤月数を示し、前者を後者で除した数値も掲げた。これは、月別の出勤日数の平均を意味する。これを見ると、全体の水準は26日以下であり、おおむね23～25日ていど出勤していた。週休制ていどの水準であったと言えよう。女工別の出勤日数にはばらつきがあり、ハンコの人とそれ以外の人で比べると、ハンコの方は1ヶ月に約25～26日出勤しているのに対して、その他の人は約24日前後だった。その差は1～2日である。ハンコの方は、ここからも、それ以外の人よりも重要な仕事にたずさわっていたものと考えられる。

同様に、表4 3では、大正8年の記載をもとに、各女工の月別出勤日数の平均を算出してある(右端)。ここでは、ハンコの人とそれ以外の人で大きな差はなく、全体が25～27日ていどの出勤となっている。日数のばらつきもあまり見られない。明治末年と比べると、各人の労働日数は1～2日増えている。また表4 3では、大正期には、月別の出勤人数も13～18人となっており、明治末年よりも増加している。したがって、大正期は、勤務している女工数が増えたうえに、女工1人ずつの出勤日数も増えていることになる。つまり、全体として労働が強化されたと言えよう。

表4 1・2をみると織機の台数も推定できる。表4 1より、一番人数が多かったのは明治45年4月の15人だが、このあたりからの記録は月の最後までできっちりに記入されていなかった。そこで、これに次いで人数が多く、出勤日数も多い10月の記録をみる。表4 2の10月19日を見ると全員出勤している。木綿と畦織を1つの機械で織っているということは考え難い。そこでタメノさんからハナさんまでの、数字が入っている枠を数えると17ということがわかる。この表は前に述べたように、数字が書かれている人のみをまとめたものであるため、ハンコの方は含まれていない(ハンコの方は布を織って

いないと推定しているの、ここでは考えないものとする。したがって、この工場には少なくとも17台以上の織機があったと考えられる。ただし、これは木綿を織る人が1人1台の織機を見ていると仮定し、木綿と畦織が書かれていた人は1人2台みていたと仮定した場合である。なお、原田式力織機は1人で4台の織機をみる事が可能であったとされていることから¹¹⁾、これ以上の織機があった可能性もある。

表4 3の 大正8年についても同様に見ていくと、出勤人数は18人が一番多

表4 3 月ごとの女工の出勤人数と日数(大正8年4~12月)

No.	氏名\月	布の種類	4	5	6	7	8	9	10	11	12	出勤日 総計(a)	出勤月 数(b)	a÷b
1	井阪ミツエ	木綿	22	27	22	28	22	28	28	27	30	234	9	26.0
2	有本マサエ	木綿	26	25	25	18	23	8	29			154	7	22.0
3	森ヒロ	木綿	26	27	19	28	23	27	28			178	7	25.4
		畦	26	27	20	27	23	27	28				178	7
4	藤原キヌ	木綿	27	27	25	28	23	28	29	27	28	242	9	26.9
		畦	27	27	25	28	23	28	29	27	28	242	9	26.9
5	忠藤キクエ	木綿	27	27	24	28	23	28	29	27		213	8	28.9
		畦	27	27	24	28	23	28	29	27		213	8	28.9
6	門林キクエ	木綿	26	27	22	27	21	28	29	26	29	235	9	26.1
		畦	26	27	22	27	21	28	29	26	29	235	9	26.1
7	森内ツルノ	木綿	27	27	25	27	23	28	29	27	30	243	9	27.0
		畦	27	27	25	27	23	28	29	27	30	243	9	27.0
8	森内マツエ	木綿	27	27	24	27	23	23	29	27	30	237	9	26.3
		畦	27	27	24	27	23	23	29	27	30	237	9	26.3
9	大中ヨシエ	木綿	25	27	22	28	23	28	23	12	22	210	9	23.3
10	門林スズエ	木綿	27	26	25	28	23	27	28	27	30	241	9	26.8
		畦								27	30	57	2	28.5
11	藤原ミノエ	木綿	26	27	25	27	21	28	29	27	28	238	9	26.4
12	富尾カネ	木綿	2									2	1	2.0
13	忠藤ユフエ	木綿	27	26	26	27	23	28	29	27	30	243	9	27.0
14	朝比奈タツエ	木綿	27	25	26	28	23	28	29	27	30	243	9	27.0
15	阪田ヨシエ	木綿		25	15	25	23	5	29	27	30	179	8	22.3
		畦		25	15	25	23	5	29	27	30	179	8	22.3
16	忠前ヨシエ	木綿		27	25	28	23	28				131	5	26.2
		畦		27	25	28	23	28				131	5	26.2
17	ハルエ	木綿		20	26	22						68	3	22.7
18	アイ	木綿		22	28	23	28	29	27	28		185	7	26.4
19	ヒサ	木綿				6	2					8	2	4.0
20	カズエ	木綿						26		27	30	83	3	27.7
21	マサエ	木綿						10				10	1	10.0
		畦						10				10	1	10.0
月別合計(総日数)		木綿	342	397	392	462	387	434	426	362	375	3577	142	25.2
		畦	160	214	180	217	182	205	202	188	177	1725	130	13.3
計		502	611	572	679	569	639	628	550	552	5302	269	19.7	
月別出勤(人数)		木綿	14	15	17	18	18	18	15	14	13	142		
		畦	6	8	8	8	8	9	7	8	6	68		
計		14	15	17	18	18	18	15	14	13	142			

備考:「通勤簿」(門林家文書箱1 3)により作成。網掛け部分が出勤簿にハンコの押されている女工。

く、そのなかでも畦織が多い9月をみることにする。網掛けしてあるユワエさんとタツエさんはハンコの人なので、それ以外の数字が入っている枠を数えると25である。このことから、大正期には少なくとも25台以上の織機があったのではないかと思われる。ここでも、木綿のみの方は1人1台と仮定し、木綿と畦織の方は1人2台見ていたと仮定している。さらに、原田式力織機を考えるとこれ以上の織機があったと思われる。

以上より、明治期から大正期にかけて、織機、女工数がともに増えたことが確認できる。ここで、第2章で触れた表2-1を確認したい。No.1と2の門林織布工場をみると、明治から大正にかけて職工数が増え、大正6年の32人でピークとなっていたことが確認できる。

3) 考察その2 生産量と賃金

大正期の布の生産量をみるため、表4-4を作成した。これは、女工ごとの1ヶ月における布の生産量の合計と、記載されていた賃金を月別に集計したものである。

例えば大正8年4月のNo.3の森ヒロさんは、日ごとに記入されている木綿の量を足すと210疋とわかり、その賃金と思われる額がこの月の「前半月」欄に「十七円五十七銭」と記入されていた。畦織も計算すると408反だった。畦織のほうには賃金の記載はなかったため、木綿のほうに書かれていた賃金は畦織との合計ではないかと推測できる。なお、No.5の忠藤キクエさんの賃金の横に書いている「キ」「ヨ」「ユ」などの文字が意味することはわからなかった。

表4-2の明治期と見比べれば、大正期には月別の生産量が多くなっている。表4-2では、1ヶ月の木綿の合計は1393疋、畦織は2523反であった。これに対して表4-4の10月を見ると、1ヶ月の木綿の合計は3899疋、畦織は7222反であり、生産量が大幅に増えたとわかる。明治から大正にかけて、木綿は1人1人の生産量はほぼ同じくらいの水準なので、女工の人数の増加により、全体の生産量が増えたと考えられるが、畦織のほうは女工1人1人の

表4 4 女工別の出来高と賃金（大正8年4 12月）

No	氏名	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月			月賃金 合計	平均賃金				
		木綿	賃金	畦	木綿	賃金	畦	木綿	賃金	畦	木綿	賃金	畦	賃金	木綿	賃金	畦	木綿	賃金	畦	賃金	木綿	賃金	畦	賃金	木綿	賃金	畦						
1	井原 ミツ江	323	14.86		356	17.05		346	16.15		470	22.7		290	9.5		461	25.4		507	31.8		531	43.56		466	39.84	220.86	24.54					
2	有本 マサ江	415	18.09		328	15.09		412	18.95		261	13.93		356	12.93		111	15.72											95.61	15.84				
3	森七郎	210	17.57	408	155	16.58	452	123	12.22	402	185		586	21.22	144	10.14	478	172	21.21	580	177	23.69	612					122.83	17.52					
4	藤原千次	121	20.27	884	92	19.84	771	99	20.68	891	112		910	25.76	66	14.57	693	104	26.7	931	122	31.7	1134		188	40.88	937	165	42.4	907	243.4	27.84		
5	志藤 キウ江		23.40 ¥ 21,430 ¥ 10,196 ● 2,687 ¥ 23.80			21.80 ¥ 20,611 ¥ 21,716 ¥ 10,411 ¥ 7.01			21.43 ¥ 20,531 ¥ 23,081 ¥ 10,991 ¥ 5.30 ¥			26.06 ¥ 21,271 ¥ 27,501 ¥ 14,171 ¥ 7.38 ¥			15.40 ¥ 15,501 ¥ 17.1 ¥ 3,86 ¥ 8.51 ¥			30.04 ¥ 27.96 ¥ 31,107 ¥ 12.80 ¥			37.08 ¥ 36,471 ¥ 37,221 ¥ 19,271 ¥			48.14 ¥ 47,28 ¥ 46,68 ¥ 22,46 ¥						558.61	106.51			
6	門林 キウ江	94	20.17	832	94	18.71	718	96	17.68	804	113	25.19	1039	11.26	72	6.64		112	27.9	1046	116	31.3	1088		98	43.06	1162	94	41.43	1100	900.7	90.07		
7	森内 ツルノ		22.72 ¥ 21,326 ¥ (44.08)			20.092 20.001			22.56 ¥ 21,09 ¥ (43.67)							15.09 13.65 (28.74) -3.15			29.02 21.98			34.06 ¥ 31.55 ¥			48.29 ¥ 43.43 ¥			54.28						
8	森内 マツ江	208	21.32	607	208	20.3	536	198	11.09	610	219	23.69	675	167	532	183	21.88	562		282	31.55	674		404	42.43	341	447	345	172.36	24.62				
9	大中 ヨシ江	314	14.17		329	14.9		303	13.18		385	17.7		295	9.25	414	22.55			118	34.08	1222					334	25.84	151.67	18.96				
10	門林 スズ江	357	16.47		302	14.35		302	15.92		368	18.4		272	8.85		411	23.54			407	23.76			159	33.35	708	168	35.98	766	190.42	21.16		
11	藤原 ミ江		16.64 7.22			16.93 8.17			18.03 7.73			18.20 7.14			9.40 7.38			26.50 18.42 11.64			26.86 ¥ 22,77 ¥ 10,611 ¥			39.60 30.96 9.47			16.88 ¥ 38.00 ¥ 36.64 ¥							
12	高尾カネ	35	1.61					394	25.76		385	26.44		288	16.78		482	56.76			190	62.19			492	80.03		485	91.32	408.44	45.38			
13	志藤 ユウ江	280	23.8		238	21.76		256	23.08		274	27.5		230	22		271	31.1			281	30.1		276	27.61			302	54.36	261.21	29.03			
14	朝比奈 タツ江		23.6 5.96 7.22					23.08 ¥ 16,337 ¥			18.31 16.337		294	46.81		230	26.85		272	31.1			273	30.1		276			310	54	278.96	34.87		
15	阪田 ヨシ江					84	18.54	734	51	10.75	468	97		778	21.11	82	14.37	670	18	0.8	132	4.24									80.19 ¥ 14.48 ¥ 54.36 ¥ 14.85 ¥ 22.14			
16	志藤 ヨシ江				101	20.61	818	103	21.43	892	118	27.27	966		89		795	111	17.95	1040		328	18.9		192	14.08								
17	ハル江								7.35 3.99			13.20 4.20					7.05 1.84																	
18	アイ							150	11.34		241	17.4			213	8.89																		
19	ヒサ								231	16.32		323				270	9.85		384	55.24					441	67.62								
20	カズ江														38	1.73																		
21	マサ江																																	
	合計	3222	349.38	4514	3128	365.33	4839	3520	398.96	5988	4039	397.85	7096	129.48	3293	915.35	4846	4096	547.66	6801	4.24	3899	635.12	7222	1332.28	3933	752.75	6855	0	4080	872.67	5533	5302.05	32.65

備考：「通勤簿」（門林家文書箱1 3）により作成。木綿・木綿上の単位は「疋」、畦（畦織）の単位は「反」である。網掛け部分は、布の量ではなく、「工」単位の記載になっている人。「」は判読不能。賃金の単位は円。賃金欄に複数の数値が記入されている場合、合計額が計算されているので、それを最下段に入力した。

生産量が増えたことで全体が増加したことも確認できる。

ここで賃金についてもみておこう。明治期は表4-2からわかるように、おおむね1ヶ月10円以下の水準である。しかし、大正期には表4-4の右端の「平均賃金」をみると20円をこえる人が多く、人によっては50円台や100円台もいたことが確認できる。生産量の増加にともない、賃金も増えていることがわかる（ただし、この間には物価も上昇している）。

つまり個人が1日に織る布の量が増えたことで、全体の生産量が増え、その結果、賃金も上昇しているのだが、その原因は何であろうか。考えられることとしては、女工の労働時間の延長や、または織機の更新による性能の改善などが挙げられる。しかし、ここでは後者である可能性が高い。なぜなら、表2-1でみたように、No.1・2の門林織布工場では大正2年に蒸気からガスに原動力が変わったことが確認できるからである。原動機を切り替えた際かあるいはそののちに織機も更新したのではないかと考えておきたい。これにより、生産効率が上がったのではないかと考えられる。

4) 小括

門林織布工場では木織（白木綿）、木綿上、畦織が織られていた。ほとんどの女工が木綿を織り、畦織を織る女工は当初は少なかったが、生産量は木綿より畦織のほうが多い。これは第5章で見る製品の販売先の変化とも関連していると思われる。月別で女工数を見ると、明治期は11～14人であり、大正期は14～18人が出勤していた。また、女工は明治期は1ヶ月に24日ていど、大正期には、それより1～2日ほど多い25～27日出勤しており、労働強化の傾向が見られた。各女工とも1日に織る布の量の変動は月内ではあまりなかった。月ごとに全体の布の生産量は異なるのだが、季節による増減という特徴はなかった。

織機の台数に関しては、明治期には少なくとも17台以上であったのに対し、大正期は少なくとも25台以上と推測できた。以上より、明治から大正にかけて織機が増えたことがわかる。また、原田式力織機を使っていたとすると、

かなりの織機台数になり、大規模な工場であったことがうかがえる。大正期は織機の増加とともに職工の増加もみられた。さらに、織機の原動力についても蒸気からガスに替わり、労働力が強化された。これらのことは、布の生産量が増えた要因と言えるだろう。特に畦織は、1人当たりの生産量の増加が大きかった。これに伴い、賃金の増加も見られた。賃金は出来高払いとほぼ確定できる。

(山根志貴子・湯本理紗)

V. 製品の払い出し(売り上げ)について

この章では、織り上げた布の払い出しや販売の局面について分析する。「査定済品受払簿」と「木綿売上帳」という2つの帳簿を用いる。

図5 1 「査定済品受払簿」の写真



1) 査定済品受払簿

「査定済品受払簿」の概要

まず「査定済品受払簿」から見よう。図5-1を参照されたい。この帳簿は織り上げた製品について、いつ、何をどれだけ受入し、それを検反して、いつどこに払出したのかを記録したものである。図にあるように、この帳簿には、①月日、②種類、③受入数量、④月日、⑤種類、⑥払出数量、⑦代価、⑧払出先住所氏名、⑨差引残高という9つの項目があり、そのうち、①には受入をした月日、②には受入した製品の種類、③には受入した数量、④には払出した日、⑥には払出した数量、⑧には払出をした払出先の名前、⑨には製品に異常があるなどの理由で払い出されなかったと思われる製品の数量が記入されている。具体例として、図5-1の右ページの右端の行を説明すると、ここには①(1月)9日に、②白木綿を、③2000反受入して、④(1月)10日に、⑥2000反(つまり全て)を、⑧竹島宇蔵に払い出した、ということが記入されている。記録されている期間は製品の種類によって異なり、白木綿は大正4年11月から大正6年12月まで、畦織は大正5年2月～大正6年12月までとなっている。なお、製品の種類は、ここではこの2種類だけである。

考察

この帳簿を、先に述べた項目の通りにデータ入力して、それを集計した。月別、年別の払出数量を、白木綿、畦織の製品ごとに示し、合計も計算した表5-1と、年ごとに払出先別に払い出した数量を示した表5-2である。「竹島宇蔵」と「竹島商店」など、記載名称は違うが、同じ払出先と判断されるものについては、それらを合計した数値も示した¹²⁾。

年によって払出数量が少ない月があるのだが、そこに統一性はなく、理由は不明である。基本的に、畦織よりも白木綿の方が1回の受入・払出数量は多い。しかし、白木綿の方が畦織よりも受入から払出の期間が短い。つまり、白木綿は検反の作業が畦織よりも早く容易だったと思われる。

表 5 1 月別払出数量
(大正4年11月 6年12月)

年月	払出数量(反)		
	白木綿	畦織	全体合計
大正4年11月	4700	×	4700
12月	12700	×	12700
年間合計	17400	×	17400
大正5年1月	15200	×	15200
2月	10000	800	10800
3月	13500	2900	16400
4月	8500	4500	12800
5月	7300	5200	12500
6月	7800	2200	10000
7月	9200	3000	11650
8月	11300	2700	14000
9月	11200	1500	12700
10月	11700	1000	12700
11月	12900	2000	14900
12月	11200	1000	12200
年間合計	129800	26800	155850
大正6年1月	13200	400	13600
2月	12300	1500	13800
3月	14600	0	14600
4月	8100	2000	10100
5月	13300	3500	16800
6月	7100	6500	13600
7月	6400	7600	14000
8月	7500	9600	17100
9月	1700	7200	8900
10月	1200	5500	6700
11月	17400	4400	21800
12月	7400	4800	12200
年間合計	110200	53000	163200

備考：「査定済品受払簿」(門林家文書箱1 10)により作成。
 ×は記入されていないことを示す。帳簿に記入がないだけなので、白木綿は大正6年11月以前、畦織は大正7年2月以前の詳細は不明。
 白木綿の大正4年11月と畦織の大正5年2月の払出数量が少ないのは、帳簿への記入開始が、どちらもその月の下旬からであるためである。
 畦織で大正5年5月か6月か不明な分が600反あったが、5月に含めた。

表 5 2 払出先別年間別払出数
(大正4年11月 6年12月)

払出先名	払出数量(反)		
	大正4年	大正5年	大正6年
川崎合名会社	8800	20600	0
竹島宇蔵	4800	48200	78400
竹島商店	2500	60700	1900
竹島	0	0	4400
竹島関係合計	7300	108900	84700
中山	1800	3000	10200
永野	0	200	400
塚河新	0	0	1800
稲西要助	0	0	7600
双馬商会	×	26600	41900
瀬尾商店	×	0	8700
瀬尾	×	0	2400
瀬尾+瀬尾商店	×	0	11100
三本田	×	200	0
合計	17900	159500	157700

備考：「査定済品受払簿」(門林家文書箱1 10)により作成。
 網掛け部分が畦織、それ以外は白木綿の払出先を示す。
 竹島を1つの会社と判断し、合計を竹島関係合計で表した。
 瀬尾を1つの会社と判断し、合計を瀬尾+瀬尾商店で表した。

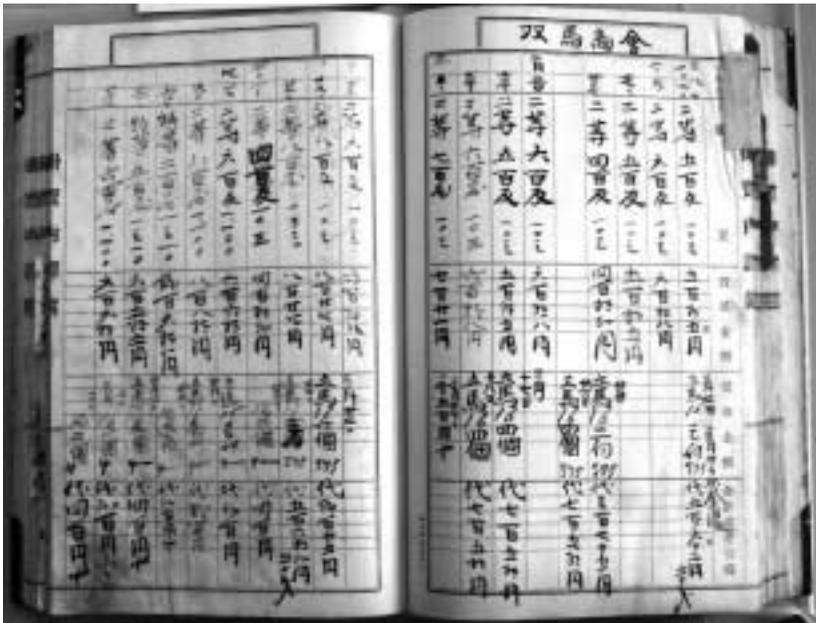
2) 木綿売上帳

「木綿売上帳」の概要

次に、「木綿売上帳」を見よう。この帳簿は、門林家が、どこに、いつ、どんな製品を、いくらで売り、その代金をいつ、どれだけ受け取った、ということ記録したものである。この帳簿には①年月日、②摘要、③売渡金額、④受取金額、⑤合計或差引残という5つの項目があり、①には売った年月日、②には売った製品の種類、数量、1反あたりの単価、③には売った金額、④には受け取った金額とその日付、あるいは受け取った糸の種類、番手（糸の太さ）、個数（単価）、⑤には糸を受け取った場合のその代価、が記入されている。またページの一番上にある欄には、売った相手先の名前が記入されている。

具体例として、双馬商会の大正8年1～4月が書かれているページを例に挙げよう（図5-2）。まず、右ページの左端の行を見ると、双馬商会に、①

図5-2 「木綿売上帳」の写真



3月5日、②二等の布を700反、1反あたり1円3銭の単価のものを、③721円分売り、④3月27日に500円を受け取ったと記入されている。これは、代金をそのまま受け取った場合だと推測される。

次に、同ページの右から4行目を見ると、①1月23日に、②二等の布を400反、1反あたり1円3銭の単価のものを、③412円分売り、④(1月20日に、立馬という銘柄の16番手の糸を2個受け取ったが、これは1個あたり375円の価値であり、⑤375円分として受け取った、ということが書かれている¹³⁾。これは、代金ではなく糸を受け取った場合だと推測される。このように、金銭の代わりに糸を受け取っている場合があるようだ。また、時折、売った金額の合計や受け取った金額の集計をしている記述もある。ただし、その間隔は不定期である。また集計に際しては必ず一定額が差し引かれているが、その理由と金額の算定根拠は不明である。

考察

この帳簿は、もともと1年ごとに相手先別に記載されていたが、データ入力にあたっては、売った相手先別に数年分を並べた。そして、①年月日、②摘要という項目の中に、さらに② 1「製品名」、② 2「数量(反)」、② 3「1反あたりの単価(銭)」の項目を、③売渡金額(円)、④受取金額という項目の中に、④ 1「日付」、④ 2「糸」、④ 3「金額(円)」という項目をもうけ、⑤合計或差引残、⑥備考(不明な点などはここに記入)とする形で、内容を整理し、金銭で受け取ったのか、糸で受け取ったのかも区分しながらデータ入力を行った。ここでは、そのデータをもとに、門林家が月間・年間でどれだけの製品を売り渡したのか、その数量を相手先別に整理した表5-3だけを掲げた。ここから以下の点が指摘できる。

第一に、この帳簿には、1反あたりの製品単価が書かれているのだが、この価格が時期によってかなり変動することが確認できる。同じ製品でも、安い時と高い時では約2倍の開きがある。第二に、先にも述べたが、門林家が売り渡した製品に対して、相手先が糸を金銭の代わりに渡していたことがわかった。これは、門林家が糸を受け取った場合、それを原料糸として利用す

明治末～大正半ば泉北地域の織物工場

ることができるからではないかと思われる。なお、この場合、糸はその単価×個数の半分で代価を計算しているのだが、なぜ半分とするのかは不明である。

また扱っている製品には、白木綿は「大正」「日之出」「別製」「別上」「朝日(印)」「鶴西」などの名称が付けられている。畦織は、「特等」「二等」だけであり、「特等」の方が単価が高く、よい製品だと思われる。これらの名称

表5 3 月別・年別売り上げ数量の取引先別集計(大正6 8年)

年月	取引先名称							月間合計
	双馬 商会	竹島 宇蔵	竹島 商店	瀬尾 商店	堺河新 商店	稲西 要助	中山 商店	
大正6年 1月	400	13200						13600
2月	600	12300						12900
3月	0	14900						14900
4月	2700	11100						13800
5月	5600	12600						18200
6月	5600	7100		1600				14300
7月	5600	7300		1800				14700
8月	7000	7500		2600				17100
9月	5600	1700		2000				9300
10月	6800	0		0	1200			8000
11月	5200	0		2100	600	10600	10200	28700
12月	3800	0		1000			1200	6000
年間合計	48900	87700		11100	1800	10600	11400	171500
大正7年 1月	3400	10200		2000				15600
2月	3100	7500		0				10600
3月	4200	7700		0				11900
4月	2600	9300		2200				14100
5月	3200	9900		1300				14400
6月	2100	5900		1000				9000
7月	4400	8150		500				13050
8月	4600	9100		0				13700
9月	4100	7000		0				11100
10月	3050	5400		500				8950
11月	2400	3100		1500				7000
12月	1900	5200	600	2000				9700
年間合計	39050	88450	600	11000				139100
大正8年 1月	1600		5400	1200				8200
2月	1700		3300	1500				6500
3月	2900		8200	1800				12900
4月	4100		6800	1800				12700
5月	5700		5627	1400				12727
6月	3300		5800	1800				10900
7月	5500		7400	1900				14800
8月	4100		5800	2100				12000
9月	4800		5700	1200			2100	13800
10月	4760		5400	2800			1200	14160
11月	3000		6500	3300			1100	13900
12月	3800		5400	2300			900	12400
年間合計	45260		71327	23100			5300	144987
大正9年1月	200							200

備考:「木綿売上帳」(門林家文書箱1 12)により作成。単位は「反」。

空白の部分は帳簿に記入されていないことを示す。よって実際の詳細は不明。

年間合計と月間合計が交差したところは、1年間の全体の合計を示す。

月の数量がわずかであるのは、月の途中から記入されていることが原因である場合もある。

から、取引先によって、白木綿を買い取っているのか、畦織を買い取っているのかを推測することができる。

3) 小括

ここでは、大正4年から8年までを通して見た取引先の変化について、払い出した製品の種類別に考察する。白木綿は、大正4年には川崎合名会社と竹島商店がそれぞれ全体の約50%と約42%の割合を占めた。川崎合名会社の方が若干多いが、共に主要な取引先となっていた。しかし、大正5年4月以降、川崎合名会社は見えなくなり、竹島商店が主な取引先となる。この年、白木綿全体のうち、竹島商店は約84%と大半を占める。竹島商店は大正8年でも主な取引先であった。次に、畦織は大正5年2月から記入が開始されていて、ここでの主な取引先は双馬商会であった。双馬商会は大正5、6年ともに畦織が多くの割合を占めており、大正5年は約99%、大正6年では約79%の割合だった。また、大正6年6月からは、瀬尾商店が新しい取引先として出てくる。この瀬尾商店は徐々に取引量を増やし、その割合を高めていく。

さらに、売り渡し数量全体の取引先別割合を見ると、竹島商店は大正6年が約51%、大正7年が約64%、大正8年が約49%で、双馬商会は大正6年が約29%、大正7年が約28%、大正8年が約31%となっている。こうみると、竹島商店が多いように感じられるが、竹島商店に出している製品は白木綿で、双馬商会は畦織である。1)の考察で述べたように、1回で扱われる数量は畦織よりも白木綿の方が多かったので、この割合は当然なのかもしれない。

以上のうち、竹島商店は、どこに所在していたか判明しないが、川崎合名会社は泉南郡沼野村¹⁴⁾、双馬商会は大阪市北区¹⁵⁾に所在していた業者だということが確認できた。大正5年4月以降、川崎合名が出てこなくなり、5年6月から瀬尾商店が新しい取引先として登場してくることから、大正5年ごろは、取引先が変化した時期だと言えよう。

次に、白木綿、畦織の需要を大正5～8年で見ると、白木綿は当初は多くの割合を占めていたが、徐々に下がっていく。反対に畦織は、当初は割合が

小さいが、徐々に上がっていく。取引先の変化とあわせるように両者が入れ替わるという傾向があった¹⁶⁾。

Ⅵ．まとめ

ここでは、本論文の分析結果をまとめる。

第2章では、明治末～大正半ばの池田谷地域の織物工場を統計資料から検討した。池田谷では明治末から織物工場の存在が確認できるが、大正初年から工場数、職工数が増加した。この時期には原動機の切り替えが進んでおり、織機の更新も行われていた可能性が高く、織物工場の経営が拡大・発展した時期だと言える。また門林織布工場は、比較的早くから工場ができ始めた北池田村の中でも、主要な工場の1つだったと確認できた。

第3章では、大正4～8年の原料綿糸の買入れの実態を検討した。その結果、5年ごろに変化があることがわかった。大正4年には、おそらく池田谷近辺の綿糸商と考えられる業者からほとんどの綿糸を買い入れていたが、6年以降は堺の綿糸商からの買入れが中心となった。中でも、藪内糸店に対しては、負債がたまり依存を強める傾向が読みとれた。

第4章では、明治末年と大正8年を比較しながら、女工の出勤状況、生産量、賃金などについて検討した。そこで、賃金は出来高払いだったことを明らかにした。また明治末と大正8年の間に、女工数と女工の労働量、1人ずつの織り上げる布の量、賃金、工場の全体生産量などがいずれも増加した、という生産状況が明らかになった。

第5章では、大正4～8年の時期における払い出し、売り渡し状況について分析した。製品の割合は畦織が増加する傾向にあり、これに伴って取引先も変化し、畦織を主に扱う取引先への出荷が増加した。この傾向は特に大正6年に強まった。こうした取引先の変化は、全体として泉南や池田谷周辺から堺や大阪への移行という特徴をもったのではないか。

以上に要約した各章の分析内容は、それぞれの部分で未知の事実を明らか

にできた点に意義があるが、ある程度全体のつながりもわかってきた。原動機が切り替わった（第2章）のち、堺からの糸の買入れが増大し、それへの依存が高まる（第3章）なか、女工数増加と労働強化が行われ、賃金上昇も伴いつつ、畦織を中心に生産量が増加し（第4章）、大阪への畦織を中心とした払い出しが増加していった（第5章）、という一連の流れが読み取れる。このような変化は、大正初年～6年ぐらいにかけてのものであり、第一次世界大戦の影響による景気の上昇期に、門林家は積極的な経営拡大を目指したことが推測される。

最後に、この論文が残した課題について述べる。第一に、今回は門林家の経営帳簿について分析したが、その作業は全体までには及ばなかった。例えば、払い出しの局面で言うと、払い出し数量は集計・分析できたが、売り上げ金額については検討できていない。第二に、全体を関連させての考察については、大正5年ごろにこの工場の転換点があったということがわかった意義は大きいですが、さらに分析作業を進めることによって、工場の経営実態とその変化を掘り下げることが課題となるだろう。それでも、この工場の経営実態をある程度明らかにできたことは一定の意義があるだろう。

今後、本論文や『松尾谷の歴史と松尾寺』が紹介した久保熊治郎の事例などもあわせ、さらに多くの具体例を積み重ねることで、泉北地域の綿織物業の実態を明らかにすることができるだろう。本論文は、そのような今後の課題に向けての第一歩にはなっただろう。

（栗山 誠）

註

- 1) 中島茂『綿工業地域の形成』（大明堂、2002年）。
- 2) 和泉市史編さん委員会編『松尾谷の歴史と松尾寺』（和泉市、2008年）。
- 3) 門林正浩氏文書。和泉市役所文化財振興課市史担当に借用中である。
- 4) 中島茂著『綿工場地域の形成』225頁。
- 5) 農商務省商工局工務課『工場通覧』明治42年版、明治44年版、大正7年版、大正8年版、大正9年版、大正10年版（いずれも復刻版による）。

- 6) 中島茂著『綿工場地域の形成』196～199・209～210頁。
 - 7) 帳簿には清算書や送品票なども含まれており、これに仕入先の所在地が書かれていることもあった。
 - 8) 堺市役所『堺市商工人名録(大正6年版)』(1917年、堺市立中央図書館所蔵)。
 - 9) 堺市商工課『堺市商工業内』(1922年、堺市立中央図書館所蔵)。
 - 10) 前掲『松尾谷の歴史と松尾寺』に紹介されている久保熊治郎の事例でも、北松尾村にあった久保の工場では、出来高払い賃金であったと指摘されている(453頁)。
 - 11) 同上書446頁。「松尾谷における綿布工場の成立」という部分で、この時期に導入が進んだ原田式力織機は、織り子が1人で4台を受け持つことが可能であったと述べている。
 - 12) 「査定済品受払簿」に出てくる「竹島宇蔵」と「竹島商店」が同じ会社であることは「木綿売上帳」からわかる。そこでは、2つの会社の記録期間がほとんど重ならないからである。また、欄外上部の取引先名称を記入した部分で、一続きの記録中に「竹島宇蔵」と「竹島商店」が入れ替わるように書かれているケースもあった。
 - 13) ここでは、単価375円の糸が2個なので、 $375円 \times 2個 = 750円$ になりそうところ、帳簿では $375円 \times 2個 \div 2 = 375円$ というように、必ず数値が半分になっている。この点は第3章で見た、原料綿糸の買受金額の計算方法と同じである。
 - 14) 大阪府内務部『大阪府下組会社銀行市場工場創業団体一覧』(明治45年)による。
 - 15) 第3章に出てくる買入帳に、双馬商会宛ての葉書が挟まっていた。
 - 16) 十分検討できなかった売上金額についても、少し触れておく。まず製品1反あたりの単価は、大正6～8年には年々上昇した。白木綿と畦織の比較では、白木綿の方が10銭ほど高いのだが、大正8年の10月ごろから、畦織の方が少し高くなったようである。畦の取引量増加はこうした価格の動きと関係していると考えられる。しかし、製品の種類によっても単価は違うので、この点については、さらに考察が必要であろう。
- [追記]門林正浩氏文書の利用にあたっては、所蔵者の門林正浩さんと和泉市教育委員会文化財振興課市史担当の方々にお世話になりました。記して、お礼申し上げます。